

会 長 挨拶

橋 本 文 作

昨年 9 月、資源工学科主任を引き継いで最初の春を迎えることになりました。ここに資源工学科を取り巻く諸情勢を報告し、会長挨拶に替えたいと思います。

今井直哉教授は昨春めでたく古稀を迎えられ、学則により本年 3 年を以て定年退職されることになりました。世の定めとは言え、今井教授が教室を去られるのは寂しい限りですが、これからはご自愛の上益々難しいことが予想される教室の将来を学外から優しく、また厳しく見守って頂きたいと教室一同願しております。

今井教授の後任としては内田悦生専任講師が助教授に昇任して大学院の研究指導や演習、講義を受け継ぐことになり、教育・研究体制には万遺漏なきを期しております。教室では今井教授の人事枠を用いて大塚教授の先取り人事として山崎淳司助手（57 年教育地学卒）が 4 月から専任講師に新任されることになりました。教室ではこれら若い人の活力に期待するところ切なるものがあります。

原田種臣教授は 4 月から 1 年間、資源・素材学会会長の重責に就かれることになりました。学会のサバイバルを賭けて頑張って頂きたい皆様のご支援をお願いする次第です。

既にご承知のこととは存じますが、早稲田大学では理工学総合研究センター構想のもとに理工学部と大学院理工学研究科及び理工系研究所を一元化して研究教育施設を充実し、教育・研究体制の強化をはかる一環として新棟の建設に着工しました。又この資金の一部

として 30 億円を目標として募金活動を行っております。何卒応分のご寄付をお願いする次第です。

さて、早稲田大学に限らず全国の国立大学においても同様ですが、資源工学科を取り巻く環境は益々厳しさを増しております。折角専門教育を受けながら学生は資源関連分野には殆ど就職しておりません。最近いくらかは少なくなりましたが、金融関係の気が高く、次いで分野は多方面にわたりますが情報関係要因として就職する者が多く、製造業志望の学生は少ないようです。このことは例えば京都大学においても言えるそうです。又、他の大学では教養課程から専門課程に進むとき志望者が少なく定員割れし、さらに折角専門教育を受けながら、それを活かす分野に余り就職していないということです。

こういった現象を他から見れば、資源産業が現代社会を支える不可欠のものであるという共通認識は持ちながら、「何のために専門教育をやるのか、そのような学科はもう必要ないのではないか」という素朴な疑問が出るのは当然であります。このような事を反映してか現在国私立を含めて資源工学科は余り人気がありません。早稲田大学について言えば、ここ 2～3 年の入試を見ても定員 60 名を確保するのに苦勞しています。すなわち、入試成績を他学科と同じレベルで切ると定員を確保するのが困難になってきました。資源工学科の存在理由が問われる所以です。あと 4 年後の 1995 年から入試人口が長期にわたって激減

します。今までは多くの受験者の中から「大学が学生を選ぶ」という図式でしたが、これからは受験者が「大学を選ぶ」という方式に入試模様が様変わりしようとしています。早稲田大学理工学部は学生が「選ぶ学部」に入るでしょうが、資源工学科が果たして「選ばれる学科」に入るのでしょうか。サバイバルをかけてPRし始めた国立私立大学・学部が現にあります。これを本に例えるならばその中身を思い切って変え、さらに場合によっては表紙も変える必要があります。資源工学科は採鉱冶金学科、鉱山学科を経て現在に至っておりますが、人事に就いては「現在の資源工学科が続く」ことを前提として、もともと必ずしもバランスしているとは言い難い教員組織において、退職される先生の専門の延長上に新任人事を行ってきました。これでは世の

中の進歩に対応できません。これからの教育は長期展望のもとに従来の技術体系から脱皮し、将来の為に応用性のある学問体系に編成替する必要があるように思われます。

もう一つ大きな動きがあります。これは学科を分離統合して再編しようとするものです。早稲田大学理工学部では理工学総合センター構想がありますが、学科再編に対しては表立った動きはありません。しかし、国立大学ではその動きは急であります。これは約20年前に故井上勇教授らが提唱していた研究院構想に似ており、大学院を中心にして教員組織を再編成し、逐次学部組織も再編しようとするものです。このような改革は早いほどよく、ツレートであってはなりません。会員諸兄の前向きな提言を期待する次第であります。

この50年を顧りみて

今井 直哉



今井 直哉(いまい なおや)。大正9年4月13日東京に生れる。早稲田中学校(現早稲田高校)、第一早稲田高等学院を経て昭和20年9月30日早稲田大学理工学部採鉱冶金学科卒業。東京科学博物館研究嘱託を経て昭和24年4月早稲田大学第一理工学部専任講師となる。昭和25年6月新潟大学専任講師(理学部)へ転出、以後助教授を経て昭和34年4

月新潟大学教授(理学部)へ昇任。昭和38年5月新潟大学教授退官、6月1日付早稲田大学第一理工学部教授、平成3年3月31日付定年退職。この間の主な公職、学内：新潟大学理学部地質鉱物学科主任、早稲田大学理工学部研究所所長、早稲田大学高議員、同理工学部資源工学科主任。学会：日本粘土学会会長、日本鉱山地質学会評議員及び編集委員会委員長、学会賞審査委員会委員長。日本鉱業会鉱床探査委員会委員長、日本地質学会評議員、国際粘土会議(1969)、組織委員会委員、国際鉱物学連合・国際鉱床学連合東京・京都国際会議(1970)組織委員会委員、日本学術振興会ウラン・トリウム鉱物研究委員会委員。官庁その他：科学技術庁技術士試験委員、資源エネルギー庁総合エネルギー調査会専門委員、動力炉・核燃料開発事業団高レベル廃棄物地層処分委員会委員。

昭和20年7月、私は陸軍に招集され、野辺山にあった砲兵の補充隊に初年兵として入隊したが、あっという間に終戦を迎え、9月5日に復員した。お前は英語ができそうだから長野の師団指令部でしばらく働かないかという進めをふり切って、父親の病気を理由に中央線で帰京した。

私は学部学生時代にも海軍嘱託として、ニューギニア学術調査に参加し、昭和19年暮には零下20°Cの朝鮮半島に赴き、航空機エンジンの発火せんに使用される金雲母を探して歩いた。以来、今日まで約50年の間“野外資源地質専門家”として、フィールドで片時もハンマーを手離すことはなかった。万国地質学会議が明年(1992年)日本で開催されるが、2本のハンマーをぶつちがいにしたそのシンボルマークの下にMente#et#Maleoというラテン語が記されている。かつて、既に故人になられた北大の湊正雄氏・小池清氏は「頭をハンマーで」と訳されたが、私はこの言葉を学生諸君に対して「歩け、叩け、考えろ！」と意識し、地質学の実践的な面を強調したものである。そして、最終講義も「石を叩いて50年」という演題の下に、ハイテク機器の発達した現在でも、地質学はフィールドから出発してフィールドに回帰するという“フィールド古里論”を述べた。

われわれの研究の歩み、また個人の人生の節目もわが国の戦後の経済成長と密接に関連するので、この観点から私のこれまで歩んできた道筋を三つの時期に分けて記述することにしよう。

第I期は終戦から昭和25年に亘る時期で、いわば敗戦後の混乱期で、日本の経済も“やみ経済”で代表され、正常な時期とはいえず、国民の皆が飢えていた時である。まず、生きるためのエネルギーの確保と食糧増産のための肥料獲得にせい一杯の時期で、前者は石炭の傾斜生産、後者はキースラーガーの開発による硫化鉄鉱の生産にたよっていた。この時

期の資源地質専門家の任務はキースラーガーの有効な探査・開発であった。私も日立鉱山のキースラーガーの構造規制の研究に従事し、当時最も大規模な赤沢鉱床を研究対象とした。鉱山の寮に泊って坑内外の地質調査にあっていたが、朝の起床のサイレンを空襲のサイレンと混同して困った。

第II期は日本経済が次第に正常となり、また奇跡の復興を行った時代であるが、フィールドの食糧の蛋白源は“みがきにしん”で、多くの地質専門家が肺結核に倒れた。私の新潟大学時代に相当し、昭和25年から昭和38年に亘る約10年間の期間である。昭和25年6月、夜汽車にゆられて一晩かかって一家が早朝新潟に到着したことを昨日のように覚えている。この時代は私にとって30代から40代初頭に亘る人生の最も大事な時期で、5名の教官、2名の事務官、1名の技官に対し1学年の学生数は1～5名であった。また、2名の教授が教室の雑用を引き受け、助教授以下の若い教官は勉学に専念することができた。また雑誌会(談話会)はきびしく、教官相互の切磋琢磨により十分充電できたことは幸せであった。自宅も教室に近かったので、自宅で夕食後研究室で夜遅くまで勉強できた。

第II期で注目すべきことは、新制大学の地質学の増設により多数の研究者が地方に分散し、地域的問題に本格的にとり組み、これらを統合した共同研究が推進されたことである。特に、黒鉱(型)鉱床を胚胎するグリーン・タフ層の古生物・層位学・堆積学・火山層停学・鉱床学など多岐に亘る専門の研究者による共同研究は多大の成果を挙げ、黒鉱(型)鉱床の成因論に寄与した。また、グリーン・タフ層の基盤地域に発達する赤谷・和賀仙人型鉄鉱床の成因論にも重要な影響を与えた。

第III期は私が早稲田に復帰した昭和38年6月から定年を迎える平成3年3月末日までの期間であって、約28年に及ぶ。私にとっては、これまでの研究が一斉に花開き、結実した最

も幸せな時期であった。新潟県赤谷鉄鉱床、飯豊鉛・亜鉛鉱床、五十島螢石鉱床および岩手県和賀仙人鉄鉱床から得られた熱水性マグネシウム系粘土鉱物や熱水性ドロマイトなど炭酸塩鉱物の研究は大塚良平教授らの協力により急速に進展し、特にセピオライト・パリゴルスカイトなどの鑽状鉱物の研究はわが国の代表的なものとなった。ただ、残念なことは、昭和50年代に入るわが国の稼行鉱山の数は急速に激減し、鉱床の野外における調査・研究の機会を得ることはますます困難となった。

昭和50年代に入ると、韓国留学生3名が大学院博士課程に進学し、これに伴い韓国の将単鉛・亜鉛鉱床、蔚山鉄・タングステン鉱床、第一蓮花鉛・亜鉛鉄床の調査・研究が、日本人学生の協力の下に行われ、多大の成果を挙

げ、また3人の韓国留学生がともに現在韓国・国立大学の地質教室の教員として活躍していることは大変嬉しいことである。

以上、私が停年まで歩んだ道を時の流れにしたがってごく簡単に記したが、“これからの道”についてもちょっと触れたい。私は現在社会に多大の借金を背負っている。これまで科学研究費だけでなく膨大な研究経費を使用させて戴いてきた。これに対して、現在“未完成”の多数の論文をかかえている。命ある限りまずこれら論文を完成して早く借金を払う義務がある。また、韓国のいくつかの大学で特別講義を約束しながら多忙に紛れこれを果たしていない。心静に未完成論文を完成すること、特別講義の巡礼の旅に出ること、この二つが現在の私の願いである。



今井直哉先生のこと

鞠子 正

本年三年で今井先生は定年で大学を退かれます。先日、先生に「御感想は？」とお聴きしましたところ「嬉しくてしょうがない」という答えが返ってきました。これからは自由に研究が出来るからということです。私は本当に先生は幸福だなと思いました。先生はこの世に地質学を研究するために生まれてこられたのであって、そのことは定年などという俗事とはなんの関係もないのです。

今井先生の地質学に対する志向は、大学に入らずと前からであったと思います。桜井欽一先生の主宰する無名会で早くから鉱物とおして自然科学に親しんだ先生は、早稲田大学第一高等学院（旧制）に入り、杉山隆二先生という強烈な個性を持った優れた師に巡り合いました。これによって先生は地質学に対する志向を益々固められたのだと推察されます。先生と私とはほぼ十年の年齢差がありますので、新潟大学の少壮助教授であった先生とお会いした時、私はまだ、大学院生でした。それほど度々ではありませんでしたが、新潟時代の先生とお会いするのは常に野外地質調査のときでありました。殆ど本の知識だけであった私にとって、それは生きた地質学を学ぶ貴重な機会でありました。その頃先生は御自分の研究テーマである赤谷鉱床以外に、新潟大学地質教室の総力を挙げて行っていたグリーンタフの研究にも没頭されておられました。新潟の守門岳の麓で、一緒に歩きながら、石を叩きながら、また、夜お酒を飲みながら、その成果の一端を聴くことができました。当時、日本のグリーンタフの層序、とくに、火山層序の研究が急速に進歩しつつあり、これが秋田北鹿地域における新しい黒鉱鉱床の連続的発見の端著になったことを考えれば、感慨深いものがあります。先生が早稲田に戻

ってこられてからは、先生のお供で野外・坑内を問わず調査に行くことが当然多くなりました。とくに、岡山県山宝鉱山の調査はかなり長期にわたりましたので、思い出深いものがあります。こうして、私は知らず知らずのうちに先生の地質調査法のノウハウを体得できたのではないかと感じております。

今井先生のことを語るのに、お酒と煙草を除くわけにはいかないと思います。全盛期においては、日本酒であれ、ウイスキーであれ、その飲み方は痛飲という言葉そのままでありました。殆ど食べないで、飲んで談論風発というのが今井方式でした。先生のお酒を最も特徴づけるのが、飲みながら地質の話、研究の話だけをするということです。野暮という人がいるかもしれませんが、これこそ今井先生の真骨頂であります。論文を書きながらウイスキーを飲む。坑内で石を叩いては旨そうに煙草を吸って考える。先生の場合、酒も煙草も地質学鉱物学のため研究のために存在していた、といったほうが良いのかも知れません。

ある年の暮だったかと思いますが、私は飲み疲れて、家路をさして池袋の西武線ホームにやってきました。すると、反対側のホームで、大変御機嫌の状態の三人の紳士(or#Tora#?)が気持ち良さそうに歌を歌っています。それが聞いたことのあるような声です。よく見ますと、いたいた、今井・大町（故人、元山形大教授、調査所鉱床部長）・広渡（元九大教授）の三先生です。これから、又外に出て飲みに行きそうな勢いでしたので、見つかったら大変と私は急いで人込みに隠れました。先生のお酒は良いお酒で、悪酔いは殆どされませんでした。年を取られるにつれ、東伏見のお宅まで先生を送り届ける率がだんだん

高くなりました。ある年先生は突然ビール宣言をされ、ビール以外の酒を決して飲まれないようになりました。そして昨年、先生は体調をややくずされ医者に従ってビールも煙草もあっさり止められました。これはお酒も煙草もそれ自身が目的ではなく、研究の促進材に過ぎなかったので簡単に止められたのでは

ないかと推量する次第です。

先生には研究の仕事がまだ一杯ありましょし、私共後輩を叱咤激励する役目もお忘れにならないよう、これからもお元気でお過ごし下さるようお願い申し上げます。

(S28年鉾山卒・早稲田大学教育学部教授)

アイキナイトの思い出

渡辺 則道

卒論から修士、博士課程を通じて感じた今井先生の研究、教育方針は“フィールドに立脚した地質・鉾床・鉾物理学をやれ”という事でした。先生御自身もこれを自ら実践され、弟子の私共もその影響を強く受けました。

大学院に入ってすぐ、フィールドの勉強の為金属鉾事業団が実施していた広域調査の山形吉野班に見習い実習生として放り込まれ、以後、博士課程修了まで、山形、米沢、会津のフィールドと研究室を行ったり来たりの生活となりました。

グリーンタフ、黒鉾鉾床を中心とした伝統的手法による研究を行っておりましたが、黒沢鉾山で採取した黒鉾を研磨して反射顕微鏡で見ていた所、見慣れない鉾物が出て来ました。何だか判定がつかず、今井先生に相談しましたら、先生はまず当時導入したての教育学部のEPMAのチェックの手はずを整えて下さり、これで含ビスマス鉾山であることが判明、アイキナイトらしい所まで進みましたが、同定する為にはやはりX線回析が必要でした。私にはこんな小さな対象物のX線回析など、どうやっても無理とと思っていましたが、当時、科学博物館におられた加藤昭氏にお願いして、同氏の芸術的な技で顕微鏡下で、この鉾物の表面にキズをつけその時発生するカケラ、粉を細かいガラス棒の先にくっつけるという作業を行い、これと、これも当時理学電機が開発したばかりの微小X線回析装置を

利用させて頂き、最終的にアイキナイトであることが同定できました。今井先生のフィールドから最新機器までの視野の広い知識と常にどういう研究手段、手法が開発されているかをウォッチしている姿勢に大いに感銘を受けた次第です。

その後私はトーメンに入社、鉾山開発や鉾石、地金の輸入などに携ってきましたが、何年後かに銅地金の輸入を検討していた時、銅地金中にビスマスが多いと、銅線に引いた時に断線が生じやすいので、ビスマス含有量が問題となりました。思い出深いアイキナイトも、嫌われものであったのかと同時に今井先生の下での研究室時代を思い出しました。

私は博士課程を終えて民間会社に出ていってしまいましたが、その後、今井先生の研究室には先生の御指導の下、良い後継者も育ち大きく発展していると伺っております。大変うれしく思うと共に、私自身、いつまでも今井先生の弟子であることを誇りに感じております。

これからも益々お元気で御活躍されることを心から祈っております。

(S41年資源卒・トーメン(株)非鉄金属)

今井先生の思い出

小川 勝美

資源工学会誌を毎年楽しく読ませて頂いていたが、いつか寄稿を命じられであろうと覚悟はしていた。それが「今井直哉先生の退職記念号へ」とのこと。現在の心境は、ちびまる子ちゃん流に言えば、当てられなければいいのになあと思っている時にさされ、立った方がいいがどうしていいかどぎまぎしている状態である。ここは今井先生の豚弟子である私が岡山県山宝鉱山（私のテーマの一つ）のLimestome（確かPermian）の崖から飛び込む思いで自ら叱咤しつつ筆を進めることにする。

まず簡単に自己紹介から。48年に学部卒、50年修士終了、53年博士号取得、54年に公害資源研究所に就職。

卒論は博士過程の田中耕平さんのテーマとして長瀬付近の三波川帯に出るstilpnomelaneについて地質鉱物学的な研究をした。先生が重要視されているfield調査はこの時だけである。

今思えば恥ずかしい限りであるが当時卒論で黄河等の河川によって渤海に運び込まれた土石がどの様に堆積分布するかをコンピュータシミュレーションしてみたいと思っていた。上述したように実現はしなかったがコンピュータをやってみないかと言われE PMAの補正計算やX線回析データの計算などを手初めに鉱石や岩石中に含まれる微小鉱物の同定に関する研究をすることになった。

当時理工学部には旧式のIBMしかなく出力結果を得るのに数日かかりエラーで弾き飛ばされてばかりいた。東大の正路先生が東大の計算機センタHITAC用に補正計算プログラムを作られておりそれを頂いたためHITACを使用しによく行った。右も左もよくわからないため数回偵察（使おうと思って行

くのだが何も使えず帰った）を行った。当時はTSSなどほとんどなくカードによるバッチ処理が主流であった。その後数年間は正路プログラムの変更、他の補正法によるプログラムの作成、データ計算などでちょくちょくセンタに行った。

今井研に入ってから数年間は研究費が少なかった。夏頃に研究費の使用のストップが先生から言い渡されて、それから先生にとっては苦悩の集金活動が始まり10月頃からまた使用できる状態に復帰することが多かった。一方備品で重要なものとしてはライツのオルリプランポール顕微鏡（先生はよい時期に買われており非常に安く入手された）X線マイクロアナライザのJXA50Aについては私も驚いたのではあるが、私が冗談で今度の科研費は先生の所に落ちますよ言ったらその様になってしまった。入ったおかげで大変だったが私を始め、その後の学生には大いに役立った。

思い出は沢山あり、字数に制限もあり、思いつくまま書きます。

先生から本箱を作る様に言われ早速図面を引いて木工に頼んで作ってもらったはよいがみんなで運び込む段になってエレベータに入らず思案の末階段を12階まで持ち上げた。皆から非難ごうごう。確かホワイト1本で許してもらった。この様にして本箱だらけになり先生の口癖である潜水艦まさに沈没するという状況になった。

忘年会はよく先生のお宅で開かれた。常に奥さんの名にあやかって小林旭の順子の歌が歌われた。誰かに聞いた話だから定かではないが先生がかなりお酒を召し上がっている時に奥さんにお酒を持って来る様に言ったらはいお酒ですよと言って水を持って来たそうである。

研究室ではバー開店5時すこし前ということになっており先生を中心にして色々なディスカッションを毎日の様にやった。私の酒、煙草はそこで覚えた様なものであるが（先生と同様私も今は禁酒、禁煙している）その時色々なことを教わった。学会でのけんかの仕方、筋の通し方、自然現象は簡単な場合が多く複雑な時は考え直せ、目で見、音を聞き五

感+第六感を働かせ考える等今井フィロソフィが今でも私の体の中を流れている。

あいにく私は大学院時代で研究していた鉱山地質関係の仕事に就くことができなかったが今後も今井魂を大切に生きていきたいと思っている。

（S48年資源卒・工業技術院公害資源研究所）

今井先生と将軍鉱山にて

町田 稔

いつも忙しそうで、地質の事は何でも知っていそうで、少し恐そうで、それでいて時折の笑顔はとても可愛くて――それが教育学部4年生の時私をはじめ今井先生の講義を受けた頃の先生への印象であった。その翌年（昭和53年春）私は理工学部の修士へ進み今井先生のお世話になる事になった。

その頃今井研究室では、韓国からの留学生で博士課程に在籍していた李さんが、韓国・将軍鉱山の鉱床を研究しておられ、それと同時に韓国の鉱床を研究するグループができる場所であった。先生に「将軍鉱山の周りの変成岩をやってみるか」と言われたときは、やや驚いたもののうれしい気持ちでしばらく興奮していたのをいまでも覚えている。

“将軍鉱山の周りの変成岩”というテーマは「鉱床成因論の展開にあつては、鉱床母岩が辿った長い歴史を明らかにし、このなかで鉱床形成という事象をとらえていかなければならない」という先生の鉱床学にたいする基本的なポリシーのあらわれであった。

昭和53年の夏の終わり、1ヶ月間のフィールド調査のうちはじめの10日間は先生と共に将軍鉱山周辺地域のいろいろな地質を見て歩いた。日本ではお目にかかれぬような先カンブリア紀の眼球状片麻岩、緑色の含バナジウム白雲母の発達した珪岩層などが見られ最初のうちはえらく感動したものであった。

調査の間の事は、学問的なものよりむしろ先生の御人柄についての事を良く思い出す。

例えば、先生と李さんと私の3人で1日の調査が終わって、夕方てくてくと鉱山の宿舎の方へあるいて戻る途中に小さな雑貨屋があった。先生が何か李さんに話すと、李さんが店の中に入って行ってしばらくしてヤカンいっぱいマッコウリをもってきた。白いどぶろくの様な地酒である。これが適当に冷えていて、汗をかいた後ののどには溜まらなくうまいのであった。3人共ほとんど幸せな気持ちになって宿舎に戻っていった。

その頃の将軍鉱山は、本格的な操業をはじめまだ間もなく、周辺の部落にやっと電気が引かれたばかりであった。宿舎は、鉱山事務所の横にあった。先生がおられる間は夕食を鉱山の所長さんや副社長さんと一緒にする事が多かった。その席では、韓国の焼酎が出され宴が盛り上がる。当時、まだ韓国では御年輩方は、かなり日本語を話す事ができたのでお互いの会話はスムーズであった。

話しは多岐に渡っていたので、いまでは良く覚えていないが、とにかく所長さんや副社長さんが先生と意気投合していたのは覚えている。それは、先生が、時々言われたアジア人としての共通する信条が先方にも十分通じたためであることは私にも判った。またその様な席で先生がおもむろにビール瓶を握りし

めてヨカ〇ン踊りを披露された時は、勿論先方にもバカうけであり、また先生の青春時代が目に浮かぶようでもあった。

この様にフィールドでは、先生の御人柄に触れる機会が比較的多かったように思われる。

一方、研究室では、自然を探求する者としての心構えを教えていただいたと思う。それは、「後になって崩れない仕事をやれ」と言うことであった。そのためには、基本をしっか

りと身につけよ、現場の観察をしっかりやれという教えであったと思う。卒業後探査という職に就いている私にとってこの教えは、大きくかつ重い物であると感じている。

最後に、今後とも我々弟子共に、研究の面、人生の面などについて御指導いただきたく、先生の御健康を祈念いたします。

(S55年資源卒・三井金属資源開発㈱)

韓国留学生から見た今井先生

李 鉉具

1975年に日本へ渡航し、1年間の日本語研修を終えた後、早稲田大学に入学するため今井先生を訪れた。51号館12階のエレベータを降り、今井研究室を見つけた時の感動は今でも頭の中に鮮明に残っている。研究室前に置かれたビールとウィスキーの空瓶を発見した瞬間、早稲田大学にはバーがあるのかなと変に思いながら、もう一度今井研究室であるのか確かめてみたが、間違いなかった。キャンパス内では、酒はおろかタバコさえ禁止されている韓国の大学を卒業した私が驚くのは当然のことであった。勇気を出してノックをし中に入った時、もう一度驚いた。学生が一人もいないうえに、コップやウィスキーの瓶が散らばっていたからである。しばらくして、約束時間の9時半ぴったりは今井先生が研究室に走り込んでこられた。背が低く冷厳に見える今井先生は、「どうもどうも」を繰り返しながら入ってきた。私は、大学時代遊んでばかりであり日本語がわからなく緊張が高まっていた。そのような私の姿をすぐにとらえ、軽い話をして私を親切に迎えてくれた。その当時の私の日本語力では、今井先生の話を理解するのは容易ではなかった。後でわかったことであるが、日本の学生でさえ今井先生のお話を理解することはむずかしいといわれている。話の内容が次々と変わり、モスクワで

の警察や石の話を聞いているうちにメルボルの工事現場には一人の人夫に対し三人の監督が働いている話へと変化するからである。とにかく半分も理解できなかった。それから5年半の今井研究室での研究活動が始った。研究室の仲間のあたたかい激励と親切に勇気を得たのであった。

今井先生にはいくつかの不思議な点、変わった点があった。今井先生は、スキーができるのかどうかわからないが、毎年卒論が終わると研究室全員でスキー場に行くことを提案し、最終の日には卒業生の歓送会を開いた。私は、今井研究室ではスキーに行かないと卒業できないとの同僚の言葉を真剣に受けとめ、毎年2月になると奨学金を前借りした。そのおかげで、履歴書の趣味の欄を埋めることができた。もう一つは昼間大学と夜間大学の存在である。昼間大学で会う今井先生は厳しく、情熱的でまじめな学者である。しかし、夜間大学で会う今井先生は全く異なっていた。夕方、学生が熱心に論文を読んでいると、「勉強なんかだれもわからないうちにやることだ！」と言いながら、隠してあるウィスキー瓶を探しまわる。今井先生の健康を心配して隠してあるわけであるが、心の弱い学生が自首してウィスキー瓶を出してしまうと、それから夜間大学が始まるのである。私はおつまみもな

くウィスキーを飲まされるので酔いがまわってくるが、今井先生は飲めば飲むほど頭がさえ、情熱的な講義を行う。講義の内容は、タクシーの運転手にはおつりぐらいチップとしてあげること、ある国に行けば必ずその国の人が食べるものを食べること、私みたいな人間になるな！などであった。簡単なようではなかなか実行がむずかしいことである。

今井先生は、ほぼ毎年鉱床調査で韓国を訪れたが、今井先生に会ったすべての韓国の人人々は、先生の博識と素朴で謙遜な性格のため今井先生を尊敬するようになり、今井研究室に留学を希望する韓国の学者と学生の数は数え

切れないぐらいであった。現在韓国には、私以外に今井先生のもとで博士号を取得した人が三名（朴魯榮、崔善奎、鄭在一）いるが、いずれも鉱床学の分野で活躍しています。

今井先生はいつまでも若く、早稲田大学で活躍されることと信じておりましたが、この度古稀を迎え、停年御退職されることを聞いて、歳月の流れの速さを実感しております。いつまでも健康で、長寿を重ねられるようお祈りする次第です。

（S56年資源博士卒・忠南大学地質学科副教授）

今井先生のすてきなところ

山口孔丹子

先生の退職記念をこのように紙面を通してお祝いできることを感謝致します。

私は一年間今井研究室でお世話になりました。私が資源工学科で楽しく勉強でき、無事卒業できたのも、学生を愛し、尊重して下さる先生にご指導を受けたからこそと思っています。

先生はいつも学生の立場に立って、わかりやすくご指導下さいました。授業が終わると「今日の話しはわかったかな」と必ず聞いて下さいます。質問に行くと、質問した問題に関連する事柄まで詳しく教えて下さり、教科書の中に入ってしまったような気持ちになりました。説明が終わると、今までただ難しいと感じていた問題が、とても興味深いものになっているから不思議です。

勉強を教えて下さっている時の先生は、とても若々しく「ほとぼしる知識！」という言葉がピッタリな程、活気に満ちています。いつもお元気で、学ぶことに対して前向きな先生の姿に励まされ、勉強の楽しさを教えて頂きました。

また先生は話題も豊富で、モスクワの話し、

韓国の話し、鉱山の話し、歌の話し、ご家族の話など、先生の優しいお人柄を思わせお話しを聞くのが、私はとても好きでした。

特に鉱山の話しを聞くと、学生時代に一度もご一緒できなかったのが残念です。今井先生と山に登ると、行く道々にどんなお話しをして下さるんだろうと思うだけでワクワクします。

先生とお話しをしていると、これまでの先生の豊かな経験が伺われ、私も将来こんな大人になりたいと思うことが何度もありました。自分の未熟さに気がつき、恥ずかしくなることもありました。しかしそんなときも、今井先生はその未熟さを責めるのではなく、私の人格を尊重して下さいていると感じました。

資源工学の分野では第一線の教授でありながら、私たち学生にとっては本当によき指導者、よい先生でした。

私は今井研で勉強できてよかったと思っています。楽しく、興味をもって勉強できたこともよかったし、よい先輩、よい先生に恵まれたことは、就職した今でも忘れていません。雰囲気の良い研究室であったこと誇りに思っ

ています。

毎年先生は私たち研究室のメンバーをお宅に招いて下さり、スキヤキパーティーをして下さいます。アットホームでとっても温かいパーティーでした。私が今井研に入りたいと思っていた時、ある先輩が「今井研は毎年スキヤキパーティーがあっていい研究室だよ。」と言って勧めて下さいました。スキヤキパーティー目あてに今井研を選んだわけではないですが、その時「今井研っていい所に違いない。」と思ったのも事実です。ご自宅でのご主人ぶり、おじいちゃんぶりもすてきでした。

こんなすてきな先生と研究室を後輩の皆様

に紹介できなくなると思うととても寂しい気持ちです。先生にはいつも早大今井研にいて頂きたいのが正直な気持ちです。

これからの先生の増々のご発展に期待しています。

今井先生、長い間お疲れ様でした。ご健康をお祈りしています。

いつも私たちを覚えて下さっていること本当にありがとうございます。

すてきな今井先生へ

敬愛と感謝をこめて…

(平成2年資源卒・松下電器産業)

資源工学科の動き

平成2年度

1. 資源工学科日誌

- 4月2日(月) 入学式、
新任教員：内田悦生専任講師
新任助手：伊藤宏行助手
- 4月4日(水) 始業式 資源工学科入学者 87名 (内女子3名、石神井高等学院4名、本庄高等学院3名、早実2名、早高1名、一般高校推薦8名、帰国子女2名、外国人3名) 新入生担任は、大和田秀二助教授、
- 4月14日(土) 資友会(資源工学科の学生会)主催による新入生歓迎会が、午後4時から学生食堂(レストラン)で開かれる。3、4年生も参加し、盛大な会となる。
- 4月27日(金) 午後6時から大隈校友会館にて資源工学会総会を開催、参加者は約90名であった。
- 5月10日(水) 内田悦生専任講師、伊藤宏行助手の歓迎会を新宿「加寿翁」で開く。
- 5月11日(金)12日(土) 理工スポーツ大会が、河口湖畔で開かれる。資源工学科もボート、野球等に数チーム参加する。
- 5月19日(金)20日(土) 一年生のオリエンテーションを軽井沢の追分セミナハウスにて実施。
- 6月14日(水) 平成3年度修士課程推薦入学者決定31日名(内女子2名、教育学部7名)
- 7月20日(金)吉沢奨学金(吉沢石灰工業(株)吉沢兵左社長の寄付を基に設立した。大学院生を対象とした資源工学科独自の奨学金)第1回の授与式を吉沢兵左社長の立会いのもと、資源工学科会議室で行う。第1回の受賞者は、修士1年の岡崎朝夫、大山伸幸の両名。
- 9月9日(日) 大学院博士前期課程の入学試験(筆記)
- 9月27日(水) 平成3年度修士課程合格者発表6名
- 10月27日(土) 平成3年度一般高校推薦入学者面接8名(内女子1名)の応募者全員合格。また、早稲田実業高校推薦2名、早稲田高等学校1名。
- 10月27日(土) 資源女子会、例年通り理工レストランにて華かに行なわれる。資源工学科第1号の卒業生松井菊子(旧姓 飯田、47年卒)も初めて参加。
- 11月2日～4日(日) 理工展、同時に早稲田祭

も行なわれている。資源工学科のテーマは、「地球規模環境問題」で、関心も高く盛況であった。

12月17日(月) 実習報告会

32名と最近になく多い学生が実習に参加し、その成果を発表。

1月8日(火) 新年会

例年通り、非常勤の先生方をお招きして、大隈会館で行われた。大学院非常勤講師今泉常正先生、松沢明先生が定年退職しました。長い間ご苦労さまでした。

1月21日(月) 今井直哉教授「石をたたいて40年」と題しての最終講義、在校生、OB等多数聴講。

2月1日(金) 外国人学生面接

4名(内女子1名)、博士の外国学生1名(内

女子1名)

最終的に、平成3年度は、修士課程32名(内女子4名)となる。また、博士課程は、9名(内女子3名)

2月12日(月)13日(火) 学部卒論審査会

2月14日(水) 修士論文審査会

2月19日(火) 理工学部入試

3月7日(水) 昇格人事決定

内田悦生専任講師が助教授に、山崎淳司助手が専任講師にそれぞれ昇格。

3月12日(火) 午後6時より野村ビル46Fで、今井教授ご夫妻をお迎えして、送別会を行う。懐かしい話でにぎやかな会となる。

3月25日(月) 卒業式、学位授与、卒業生、学部97名、修士29名、博士4名

2. 就職状況

学部

(1) 鉱山業

三菱金属セメント

新日本製鉄

日本鉱業

神戸製鋼所

日本軽金属

(2) 石油関係

三菱石油(2名)

シェル興産

エッソ石油

コスモ石油

石油資源

(3) 化学工業・セラミックス

ユニ・チャーム

積水化学工業(2名)

エヌ・イー・ケムキャット

旭硝子

旭化学工業(2名)

京セラ

日清紡績

(4) 機械・エンジニアリング

日本真空技術

新菱冷熱工業

トヨタ自動車

石川島播磨重工業

ヤマハ発動機

東洋エンジニアリング

新キャタピラー三菱

日産自動車

(5) 電気

日本電気

松下電器産業(2名)

セイコー電子工業

安川電機

松下通信工業

東芝

(6) 運輸

西日本旅客鉄道

日本航空

全日本空輸

(7) 商社

(9) 銀行・証券

日本証券信用銀行

三和銀行
 協和銀行
 第一勸業銀行（2名）
 三井生命保険（2名）
 安田信託銀行

(9) 建設関係

東急建設
 三井建設

(10) 情報・ソフトウェア他

新日本情報通信システム
 日本アイ・ピー・エム
 日本デジタルイクイップメント（2名）
 日本テレコム

(11) その他

国際航業
 特許庁
 (12) 大学院

33名
 大学院（修士課程）

日立化成工業
 大和証券、インドネシア科学技術院（留学生）、
 大塚商会、ブリジストン、東陶機器、昭和シ
 ョール石油、住友金属工業、日立制作所、日商
 岩井、東京瓦斯、トヨタ自動車、静岡瓦、日
 経BP、日本デジタルイクイップメント、
 インドネシア石油、東燃、IEAジャパン、
 清水建設
 博士課程進学者8名

3. 博士学位取得者

(1) 課程による（工学博士）

オマール A・アブデルカリム：EOR用ボ
 リマーのレオロジー特性と油層
 岩石中の流動抵抗
 土田聡： リモートセンシングデータから
 得られたリニアメント情報の意
 味～抽出過程と定量値：夕張を
 例として～
 松前裕司： 特殊形状ベント管の非閉塞性・
 耐エロージョン性メカニズム

梁東潤： 韓国新礼美鉬山のマグネシウム
 カルン型磁鉄鉬鉬床の鉬物学、
 岩石学および地球化学的研究
 浅井明人： 石狩及び天塩炭田基盤岩類の地
 質学的研究 主としてイノセラム
 ス類二枚貝に基づいて

(2) 課程によらない（工学博士）

西村聡： 陶石の浮選法による高品位化と
 その分離機構に関する研究

4. 平成2年度資源工学科専任教職員

平成2年度の教職員は、次の通りです。

教授 今井直哉 資源科学研究室
 教授 岩崎 孝 開発・環境工学研究室
 教授 大塚良平 資源科学研究室
 教授 名古屋俊士 環境安全工学研究室
 教授 橋本文作 応用力学研究室
 教授 原田種臣 原料工学研究室
 教授 山崎豊彦 石油工学研究室
 助教授 大和田秀二 原料工学研究室
 助教授 野口康二 探査工学研究室
 講師 内田悦生 資源科学研究室
 助手 伊藤宏行 石油工学研究室

助手 山崎淳司 資源科学研究室
 職員 米持賢治 資源工学実験室
 職員 吉田喜代子 資源工学事務所
 なお、平成2年の学科主任および学科担任
 は次の通りです。

学科主任 橋本 文作 教授
 1年担任 大和田秀二 助教授
 2年担任 岩崎 孝 教授
 3年担任 名古屋俊士 教授
 4年担任 山崎 豊彦 教授

編集後記

資源工学科設立以来最大の120名（資源工学科の定員の2倍）の学生が入学し、4年間の教育を受け本年卒業します。若干卒業が遅れる学生はあったものの、97名が卒業でき、ほっとしているというのが本音です。

会長挨拶の言葉通り、これからが資源工学科にとって大変な時期になると思います。

そこで、選ばれる学科を目指して、平成2年度の入学試験合格発表者に、資源工学科の研究内容、教育のカリキュラム、就職先等を盛り込んで作った「資源工学科」を、1年生の担任の名前で配布すると同時に、早稲田大学理工学部受験案内、受験雑誌等に新カリキュラムの内容を紹介し、資源工学科の内容を少しでも理解してもらうよう努力しております。

こうした効果はすぐには期待できませんが、それでも、平成元年度の入学者が45名でしたが、平成2年度には、87名に、平成3年度は、97名（資源工学科史上2番目）と入学する学生が増えています。さらに、若干ではありますが合格者の中に資源工学科を第1次志望にする学生が増える傾向が認められます。しかし、2年では単なる学生の気まぐれかもしれませんので、必ず我々の情熱が実を結ぶと信じてこれからも続けていきたいと思えます。また、同時に、入学してくれた学生に対して、失望を与えることなく、資源工学科に入学して良かったと卒業時に心から思ってもらうために、資源工学科のカリキュラムも平成2年度から新カリキュラムで出発しました。ここに、若干詳解します。

地球科学・探査工学・開発工学分野と原料工学・石油ガス工学・環境安全工学分野を設置しました。

*地球科学分野：資源工学科各分野の基礎をなすもので、資源の探査、開発に必要な地質学及び地球化学を研究する。採掘、採取された資源を素材原料として処理・加工するために必要な鉱物学及び岩石学を研究する。

*探査工学分野：地質調査、物理探査等により、地下資源の発見・確認あるいは地下利用や防災のために地下構造や地下性状の解明、モニタリングを研究する。また、岩盤工学における数学応用も研究する。

*開発工学分野：地下資源の採取に有効かつ必要な規模及び時期等の評価法を習得し、採取行為に伴う社会環境への影響を考慮においた、開発設計と安全手法を把握研究する。

*原料工学分野：採取した資源から有用成分を分離し、素材原料として付加価値を高めることを研究する。また、資源リサイクリングについても研究する。

*石油ガス工学分野：石油天然ガス、地熱等の流体資源を坑井から生産し、分離精製するプロセス工学で、地層内での流動や化学処理・反応を利用する新回収法や生産物の化学を研究。また、深部や水平の掘削技術も新対象分野である。

*環境安全工学分野：大気環境及び作業環境における汚染有害物質の計測、分析、評価及びその対策と安全を主に研究する。

こうした教育により、資源工学科においても、急速に変わりつつある社会からの要請に対応し得る素養を備えた人材の育成を行いますが、まだ、足りない部分が多々あると思えますので、先輩諸氏の熱きご意見を期待しております。

(名古屋俊士 記)

〒169 東京都新宿区大久保3-4-1

早稲田資源工学会 早稲田大学理工学部資源工学科内 電話03-3209-3211内線2137

振替番号 東京1-13534

協和銀行早稲田支店 普通141-322760